



あれから数年後のある日の午前三時、寢床の中で夢うつつにして謎の天人五衰を妄想分析していた。／聡子は権力構造そのものであり、透と狂女は肉体と精神、美と醜との両義的な一致、あくまでも透は転生の真物。これら六十年間の時の捷徑が本多の夢想であること。肉体の美と精神の美をともにもつのか、肉体の醜と精神の醜をともにもつのか、いずれともつかぬ不可解の胎児、生きて誕生するのか死児となるかも不分明のまま、本多の夢想が子望として透と狂女の間を生んだ唯一の現実がこの書に存在していないがゆえに、確乎たる存在として、本多が、いや三島由紀夫がそれに賭けているもの。／豊饒の海が本多の邯鄲夢であり、その本多を夢見るのが三島であるならば、肉の衣のその中に、人に知られることのない *Manxun* への暗い、熱烈な情熱が。／*Nahos* の文学。外に現われることを極力押し止める密教的な匂い。自決さえ肉の衣であってみれば、自己顕示欲などの下司の勘ぐりどく吹く風、*disgrace* された反面教師としての暗鬱たる情熱に支えられていたことは……。／それこそ永生する人民、愚昧で醜悪である人民と、それゆえの彼らの革命的な情熱の至純さに、まるで対極的な存在、つまり透を注入し、革命という畸型児を現出せしめようとしたのではないか。自らの死が何ものをも動かさざることを、人民は愚かで醜く、世界は聡子のように傷つけられることもなく、すべてが夢想の謔言として片づけられることを了解しつつも、肉体に精神を注ぎ込む、あるいは精神に肉体の鎧を着さしめるといって、三島由紀夫の最後の夢想を自死に託したのではないか。／あの夢想する鼠の話という陳腐さこそ、三島の、左翼に対する唯一の願い。だが、左翼の現実こそ、永生の衣をかぶった不純さ、俗物性。三島は夢想の革命を、時間という腐った現実と対する唯一の願ひ。だが、左翼の現実こそ、永生の衣をかぶった不純さ、俗物性。／文学的な質の高さからは春の雪がもつとも優れ、作品の力という意味では天人五衰が傑出している。そして三島由紀夫の偽装の極みが奔馬の勲である。だから、三島の本質的な偽装としての勲は革命的であり、そこに肉体に対する決意が、自決に至る人生が決定つけられたのではないか。晩の寺は箱晦であって、この部分には何の愛着も抱いていないようにもみえる。／三島由紀夫の人民への愛、絶大なる共感ほ、洩れそうにならばなるほどに陳腐化され、諧謔化され、意識的に隠蔽される。安田若での嬉々とした様子を思い起こせばよい。左翼に抱いていたと流布された三島の危機感とは、左翼の自惚れとも、被害妄想云々の鈍感さとも隔絶した、彼の左翼に対する愛ではなかったか。／天人五衰の難解さは、三島由紀夫の戦略的な動揺によるのではないか。結局、三島は情熱に戦略を与えようという、夢想の交接に落ち着いたのかも知れぬ。／晩の寺が箱晦だというのは、大乘仏教の研究という裏返し姿勢、つまり神道でもなく、武士道でもない、完璧に三島とは無関係なものを、独力で思想の形にまで押し上げるという、三島の実質の力を証明したこと。その力量からする *Marxism* への理解、本質的な到達、それゆえに仏教という衣によって完全に蔽い隠すということ。三島由紀夫は自分に役割を与えた。誰に気づかせることもなく、まるで反対極のように身を置いて、悪の権化になって、本質的な状況を生み出そうとしたのではないか。／ここである俗説を思い出す。 *Kory Marx* はイギリスで炭鉱労働者を目のあたりにし、彼らがあまりに動物的な悲惨さのうちにあり、その存在の気味悪さに生理的に膺かされ、彼らをまるで自分とは違う生き物、唾棄すべきものと感じ、嫌悪感という貴族的な立場から、つまり獣以下の汚らしい人種を抹殺すべく資本論を書き上げたというのだ。

緑字生ズ

85

信に曰く

人生は無敵、ただ鉄片

Orionの光が

男の眠りを照らす

こわれやすい彫像

戸棚の中の

86

アトロポスの鉄のままに

男は旅に出るだろう

アラウカニ帝国の末裔に会うだろう

甲虫の絵を描きつつけるだろう

喘息の、探検家よ

87

運河の見える駅で下車する

街には針が流れている

その家を訪ねると

青い柿の實の首 グランドピアノ  
鍵盤上で脚を広げ、ウイंकする女  
肩が、ガラス細工のように透き通った

乳の河 怪物の森

イモムシのことを考え

黒いパイプを掌に包むと

生涯は煙

いたるところの駅に

星涉りの似顔絵が

88

ポーモーナ、果実の奴隷

幼きもの美しきものの肉市場

透明な白樺 ニンジン色の舌

雪よ、貝類の毒

少女の媚態

ぶらぶら頭蓋骨、炎のような喉

雨後、寒冷地ではミソサザイが鳴く

89

にわたずみ

反射鏡の向こうに

さざらめの気圏

天田地方、チューリップが立つ

磁気あらし

蒼白な溜息

紫外線と、流れゆくものの細菌

90

首には菌型、象牙の肌

天門を照らす眸、掌は産卵期の貝

はまふゆくたりよ、みよむたり

つつめしおんばりおん、だだびじおんたるべお

息吹けば、冬

91

三百六十五人のムネーモジュネー

穴居人は知らない

少女をかどわかす暗黒を

歳月の円周率を

白夜はつづき

冬、地下深く、百足のよう

92

夢精の夢の *eterna*

野ごしらえの花、花びら

白い牡鹿、スリッパ

鍾乳石

野ネズミ

まつさおな首

急に天秤にかかるもの

93

元氣とともに生まれる

奇妙な野菜のジュース

雨降りの日、大陸では

赤と黒の斑点を吹いて

人死にがあつたという

九元真母のうち巨霊という神

とのぐもる空を裂く

運命の使者とは

カラスなのかトキなのか

安楽椅子と加速度 胸のうち  
アルファに *manjima* ベーだよガマン  
想いは棟上、真夜中の十字架から石つぶて  
ふぐりびとと *Women's Lib*  
塩の話なんてでんでしおらしいので  
アホウドリが盲目になる

神仏不合 粘膜のような魔性  
時間とに  $\omega$  子の聖体拝受  
 $\omega$  子といえは  $\theta$  子と同衾する  
白子のミッチと同じ 幽霊的存在  
ひきしろう十三番目の死体にパンツ

クジャク! という声に振り返ると 太陽が破裂  
しそうな勢いで落ちている 女はそのとき眼を伏  
せしやがみこんでしまう うしろから近寄ると  
たしかにクジャクが生まれていた

あるとき 白い雲が女をのせたまま落っこちた

のぞきこむと 雲のような毛が生えていた

翌日 旅に出ると 大女が通せんぼするので切符  
を見せた 女の神は鉄を入れて汽車に乗り込んで  
しまった

空が割れている! と叫ぶと 女が見上げたので  
遠慮なくうしろからつつこんでやった

単つの瓦礫からなる島の  
ヒカリゴケ、アナアオサ  
ふたりで海を渡る  
ひとりで舟を漕ぐ  
指の位置  
鍵穴と死  
骨盤の内側が急所だ

しとと裂けるもの

島の石 人間の舌ざわり

薄い毛の感性、道端の花

*Knob*の垂飾り

裸の女が飛び出す

想像力の分裂症状、大きなおっぱいを着てこぼす

死への叛逆児、スケコマシ

コカ・コーラの壺から、ユリアの口

滅蠟法でできた夜が……

98

蟬や腹でえ鳴くのだが、敵娼の骨を抜き取り賽の目切りに百三十六、それをテーブルに配列すると、柱時計の長針がすさまじい廻転、急速大音声を発してとびかかる。巨大な乳房の年増女、ひりひりする cayenne pepper

99

ひきかたむうすい骨盤、壁をへだてて、女の首筋が燃える、忘れたのよ、大切なこと

糸切り歯の間から、燻製の蛙がのぞく、台所に首飾り、それがら 庖丁

男が feminine だから

凍りついた料理

鍵は、なくしちゃったのよお

一九七〇年十一月二十五日

絵画的な静寂

死刑執行人Gよ、おれは求愛した死者の街、師走の、革命のベル

おれは火種をなくし、裂けた心臓を取り出した

おれは対称形だ、皺の中に軀が埋まる

生者はいない、生者は!

偶然の死、真実の嘘  
104

首と涙

月光崩壊！

いかな断片をも忘れ去るべし

涙を流す人の罪深さ  
105

君たちのやさしさのびつこの靴音

自由であると信ずるに足る空語のたしかさ

気の遠くなる夜とbandoneon  
106

いのちの狂おしさ、むしはまれた夢

ああ ことばは眠る

ことばの輪がいつそうおしくくむ

空気をそそのかす  
107

死人形 花人形 水人形

意味ありげなふくみ笑いの

仏壇の錆びた首  
永遠の匂い

108

世の中の寝静まるのを待ち

声高らかに、奈落の恋人を呼び出そう

(いつしかほほえまんわれをおもえ こはながる

る じごくはまちをおおいたり)

腰が、魔の手に掴まれたように、砕かれる

軀が人形のように透き通り  
109

心臓に緑色の杭を打ち込むもの

汝、ああ、この疲れ！

匹如身の間男の死に似せて  
110

白い手袋を叩きつける

尊属を殺せ！

銃器を装備して

墜ち空、曲がれ！

眠れよ太古、やんぬるかな

へ蔭に日向に声かけて

III

叩き起こして死するなり

おれはおれの死を叩き売り

眼を濼う

死水で雪ぎ、ひたすら黙す

誰も見ていないから呑気なのだ

ホトドコロ

魂のもつ腐臭、虫の涌いた布

風のままの生涯 その音色

ああ おれの手は全季節の果物だ

剥がれた肉はひからびて

男とも女ともつかぬ白骨

III2

庭掃除。水の流れる暗黒。ふたたび、夢は時間じ

やない。冷蔵庫、牛乳の中で猫を飼う。ミヨウミ

ヨウチヨウ、saffron、オニユリ、gladiolus、つ

つじ、バラ、鏡草……。土をいらう、じよろの水、

葉尖からぼたりと落ちる雫かな。人生の empty。

肥料にせんと小便をひっかけるほど愛す。

ゆらゆらと影の燃ゆ。睡魔の登音……。開放され  
たガス栓。ストーブの焰。火災報知機。ひきしほ  
る喉、ただれた肌、血まみれの、青い瞳、spectrum、  
雪の瞬間の結晶。やさしい爆発。せつない、せつ  
ない、gardenの、感傷的な、衝撃。

火をさます鏡、永遠の持続、他人の世界。タレイ  
アの器、地獄思想者よ。白骨化したその貌、信頼  
と対話、夢の現実。闇をうるおす garden。……無  
意味と傲岸さの、がらくた。

自殺実験。闇の中でしかあらわれぬ garden。握り  
の象牙、ナマコ。陶酔。共に死のうという。優雅。  
不潔さ。観念的フリーズ。生活という死の行為、  
死という生活の行為。(闇やいうたかて、けつた  
くそわる人間の吹き溜りやろ)という越境。

tape recorder i 感電。全世界の金属の監視。

真紅の花びらのはだら。ポリバケツの液体上の、  
浮游性の微粒のゴミ……。黒猫の溺死。

(滅々たる風のように君よあれ 苔類むす地下に





白い腕がいちだんと強く、腰を抱く  
蒸気のベッドで  
ふたりの少女が愛するものは  
内臓なり

116  
ありふれた恋にはせじと  
かわいた舌で口ずさむ  
流るるは  
灰色の脚のさすらいびと  
空無なことば

117  
老ゆるものの醜い肉体、ふるき世界  
瘦せほそるいのち、はかないいのち  
それゆえに  
老ゆるもののごとくを許さざるべし

118  
老ゆるものはその生涯で、あらゆるものを畏れて  
いたが、畏れの対象になど出遇ったことがない  
皺のひとつひとつが奇妙に交錯し、くろずんだ齒

茎と静かな刻 崩れゆくものの肉体は蘇ることな  
く、ふたたび……

119  
汽水よ 赤褐色の海藻がからまる 青く光る小魚  
の群が岩場で餌を 泡立つ波間をすりぬけて 銀  
色の月のささやき 水底に沈んだ幾億の骨のあり  
か

120  
獣たちよ、海をみたすものよ、崖の切尖  
湖から森へ 街を渡り さらに山脈を越え、しぶ  
く海、遠き祖先の、哀号！

121  
紫色の肌に白い斑点をもつ貝が、夕焼けに染まっ  
た海の中を流れていく 渦がそれら小さな生命を  
織り込んで、深い深い地球の底においていく

122  
海猫の飛び交う崖よ 涸いた血の色をした岩壁よ

狼の吠える崖 幼い人魚の集う崖 やさしい潮の匂いでみたされる岩肌 漁師たちの出発を見守る絶壁 おお、それらの高みが、刻に啖われる幾億の生命を、なんと無表情に見ていたことか

123 荒涼！ 荒涼たる海よ

おお、革命の蘇生を願うなかれ  
砕かれしころのままに息絶えろ

124

灰色の砂を眺めていた少女が、老人の話に肩をひそめる 蟹が砂を噛むのはかたい甲羅を破れぬという絶望を持っているからだ 少女は美しい背をひるがえす 思い出を哀しそうに、あるいは楽しんで、そうに語る人種に呪いあれ

125

獅子のように咆哮を放ちながら泣いている少年 薄暗い地下道を行き交う人々が、少年を避けて小走りに通り抜けていく 長髪をふり乱し、顔中を涙で濡らしながら、少年は堰止められぬ嗚咽とと

もに叫んでいた「いのちが血まみれになっているんだ」小脇に抱えていた紙きれを天井高く放り投げて、少年は排水口のように嫌な匂いのする地下道を駆け出した

126

一九六九年十一月 冷たい部屋の眠り  
さめざめと泣いていた少女は  
女に変身すると  
すぐに心を整理した

127

少年よ、君は  
部屋の隅で小さくなって暮らす  
蠟燭のゆらめきが、君の夜をおびやかす

肉体は訓練を重ね  
素粒子ほどに収縮し  
地球ほどに膨張しなければならない  
そのためには  
まず肉体だけで空を翔ぶこと  
少年よ、君は

蒼白な寒さの中で  
ふと 宇宙が起きているのだと考える

128

季節はギロチン  
精神が粉々に飛ぶ  
ラッキョウのように  
死に接吻し  
青い静脈、熱い息  
洞窟の奥でうすくまるもの  
銀色の砂  
時代ののっぺらぼう

129  
この皮袋を通じて  
線路上で爆発し  
橋桁の滴となる

130

冬になると人死に出る。そんなことを思い出し  
ていた。「やっぱり不謹慎だよな」呟いてみてけ  
っさりした。擦り寄ってくる女の形は曖昧だ。白

粉と香水の入り混った匂いが鼻につく。「君はず  
いぶん厚化粧なんだね」言ってから、酷いことを  
言うと思っている。ふてくされたふりをする女の  
顔に卑屈な色が泛びかけたが、すぐに表情の底に  
沈み込み、蔽い隠される。「ふふ、嫌な人ね。そ  
の手になんか乗らないわ」

131

門札の夜叉が  
西洋風の笑みを洩らす

132

旅館の長い廊下。途中、壁の漆喰を噛みしめ、突  
き当たりの仕事場に。竈の燈影だけが妖しく揺れ、  
何のための部屋か定かではない。片隅に岩塩のこ  
びりついた三足の陶器。室内で作業する褐色の肌  
の男たちは、その彩釉技術に目もくれぬ。古い日  
記、猟奇の眼、革表紙の書物、耽溺。濡れた紐で  
くくられた輪、書物の角に貼られた刃物、毒。注  
意を与えても苦しそうに首を振るばかり。根太を  
しっかり握られているに違いない。ようやく女主人  
が現われ、宿帖に記名を迫る。

133  
 夜を記憶しない日々。煙と湿度。鳥に变身する。  
 強い翼で都市に風を。塩、ガスの噴出音。青虫。  
 灰に埋まる裸体。枝折戸が開閉し、数億の首なし  
 の餓鬼を生む。

134  
 鉛の焦げる古都。匂い。肥大した河。褐色の指、  
 腕、緑の胴体が。長雨の中で燃える橋。烟る流沙。  
 爪、髪、灰色の骨を埋める。沈む。とじめ。冬が  
 閉じる。全季節が塞がり、自然が消滅し、宇宙が  
 青黒い火球になって燃えつきても、失われぬもの。  
 市場。積み上げられた、赤ん坊の死体。甘い匂い。  
 裸の女の眠り。

135  
 ガラス張りの部屋で。世界の空気と疲労、冷酷と  
 美貌と。軀にそそがれる時間、蘇ることのない。  
 繋留、未来。第一突堤から、第八突堤、伸びる、  
 伸びる、赤い影、山脈、海へ。幾百年、幾千年の  
 思い。失われたもの。かかわらぬもの。

緑字箋 バックナンバー御案内



1

郎 幹 山 芝  
 裕 一 隆 明 石 金  
 一 隆 永 富 小 岡  
 薫 志 鷹 井 岩  
 志 彰 田 紙

夫 彦 裕 薫 哲 郎 一 彦 美 彰  
 康 隆 明 原 永 敦 俊 田  
 入 岡 小 岩 富 油 神 紙

2



郎 薫 一 郎 齊 彰  
 幹 隆 退 二 彦  
 山 井 永 天 渡 紙  
 芝 岩 富 天 渡 紙

3

定価 各1500円／郵便振替 東京1-40157 直江屋

\*品切れの場合は御容赦下さい